

資料9

サル類に寄生するアメーバの病原性に関する研究

橘 裕司 (東海大・医・感染症)

これまでに我々は、霊長類研究所内の飼育マカクについてアメーバ類の感染状況を調査し、病原性のある *Entamoeba histolytica* は検出されず、非病原性の *Entamoeba dispar* による感染が多いことを明らかにした。それは、わが国でヒトから単離されるのがほとんど *E. histolytica* であり、*E. dispar* は少ないという結果と対照的であった。そこで、サルに寄生する *E. dispar* がヒトに寄生するものと同一種であるかどうかについて検討した。

ニホンザルの糞便から、培養によって *E. dispar* 2株 (PRIKU-44、PRIKU-55) を単離した。虫体のゲノムDNAから peroxidoxin をコードする遺伝子をPCRにより増幅し、その塩基配列をヒト由来の標準株 (SAW1734RclAR) の配列と比較した。

732塩基について比較したところ、PRIKU-44とSAW1734RclARの間では約1.0%、PRIKU-55とSAW1734RclARの間でも約1.0%の配列に違いが認められた。しかし、これらの違いはすべて異なる箇所認められ、PRIKU-44とPRIKU-55の株間では約1.9%の違いが存在した。この結果から、サルとヒトに寄生する *E. dispar* は同一種と考えるのが妥当であると思われた。

資料10

サル類における病理組織学的研究

(肺, 眼病変を中心として)

野田亜矢子, 酒井洋樹, 柳井徳麿, 柵木利昭

(岐阜大・農・獣医・家畜病理)

病死, あるいは実験殺したサル類のホルマリン固定標本について, 定法に従いパラフィン切片を作成後, ヘマトキシリン・エオジン染色を施して, 光顕下で観察した。

眼球についての観察では, 肉眼的に白内障を認めた個体において, 水晶体の水腫様の膨化などの病変を認めた。また, 肉眼的には異常を認めなかったものでも, 眼周囲筋に炎症細胞の浸潤を認めた個体を数例認めた。

ニホンザルを中心としたサル類での肺についての観察では, 炎症などの変化を認めない肺についても, 血管周囲性にマクロファージにおける高度の炭粉の沈着が認められた。これらの変化は大気汚染との関係が考えられた。今後の課題として, 炭粉の成分の分析や, 地域, あるいは種による差異の検討を行っていきたいと考えている。